

一八八七年五月七日(土)

聖ラーマクリシユナ、信者たちのハートの中に

ラーマクリシユナの最初の僧院マドとナレンドラたちの修行と強烈な離欲

今日はボイシヤク月の満月の日。一八八七年五月七日、土曜日の午後。ナレンドラが校長と話をしている。カルカッタのグルプラサード、チョウドリー通りにある一軒の家(校長の自宅)の階下の部屋の長椅子の上に二人は坐っている。

その前、モニはその部屋で、『ベニスの商人(シェイクスピア作)』『コーマス(ジョン・ミルトン作)』および、ブラッキキーの『セルフ・カルチャー』を読んでいた。学校で教えるので、その下準備をしていたのである。(訳註、モニ―マヘンドラ・グプタが使った仮名の一つ)

タクール、聖ラーマクリシユナが信者たちを限りない大海に投げ入れてご自分の居場所にお帰りになつてから、数カ月が過ぎた。タクール、聖ラーマクリシユナのお世話をした未婚の、或いは既婚の信者たちは愛情で結ばれ、もう離れることはできない。突然、馬車の御者がいなくなり恐れてしまっ

たが、分け御霊みたまであるお互いの顔を見つめながら過ごしていった。もうお互いの顔を見ないでは生きていくことはできない。他の人と顔を合わせることもさえも苦痛なのだ。あの御方の話のほかは、何もかもが嫌なのだ。みんなは思う——もうあの御方に会うことはできないのだろうか？ あの御方はおっしゃったではないか——「熱心に呼べば、心の底から呼べば、神様はお姿を見せてくださる」と。おっしゃったではないか——「心底から呼べば絶対に聞いてくださる」と。人ひと気けのないところではあの喜びの権化ごんげであるお姿が目めに浮かんでくる。そして、目的もなく一人で泣きながら道をさまよい歩く。だから、タクルはモニにおっしゃったのだらう——「私が捨身しつじんしたら」お前たちは泣きながら路頭に迷うだらう。だから肉体を捨てるのが、少し苦しいんだよ——ある者は思う——「あの御方が去ってしまったのに、まだ私は生きている。この偽いつわりの世俗いせに、まだいなくてはいけないなんて！ この肉体を捨てようと思えばできることなのに、そんなこともできない！」

若い信者たちはコシポールの別荘に寝泊まりし、日夜お世話に明け暮れていた。あの御方がお隠れになってから、いやいやながら機械仕掛けの人形のように各自の家に帰っていった。タクルは誰にも、外見ではサンニヤーシンとしての印イン（黄衣ワウイなどの服装）を着るように、また名字を使うことを放棄するように指示されたことはなかった。タクルがお隠れになった後も何日かは、彼らは、ダッタ、ゴーシュ、チャクラバルテイ、ゴーシャルなどの名字を使って人々に紹介していた。けれどタクルは、内面では彼らを放棄の人にさせていかれたのだった。

二、三人の信者には帰る家がなかった。スレンドラは、「兄弟よ、君たちはどこに行くんだい？ ど

こか住む処ところを見つけよう。君たちがそこに住んで、我々も安らげる場所が一カ所欲しい。そうじゃなかつたら、世俗でこんなふう日夜どうやって過ごせばいいんだい。君たちはそこに住めばいい。私はタクールの御用セツアのためにコシポールの別荘に少しだけだがご奉仕さし上げていた。当面はそれで家賃はすむだろう」と彼らに言った。スレンドラは、最初の一、二カ月はひと月当たり三十タカ負担してくれていた。だんだんと他の兄弟たちが集まって来て、五十タカ、六十タカになっていった。最終的には百タカまで負担してくれた。バラナゴルに家が借りられて、家賃と税金で十一タカ、バラモンの料理人の給料が六タカ、残りは米や豆などの出費に充てられた。年長のゴパール、ラトウ、ターラクには帰る家がない。若いゴパールは初め、コシポールの別荘からタクールの使われた物をこの家を持つてきた。コシポールの別荘で雇われていたバラモンの料理人シャシーも一緒にやって来た。夜はシャラトが来て泊まっていた。ターラクはプリンダーヴァンに行っていた。何日か後には彼も来て仲間に加わった。

ナレンドラ、シャラト、シャシー、バブラーム、ニランジャン、カーリーたちは最初のころ、時々家に帰っていた。ラカール、ラトウ、ヨーギン、そしてカーリーはちょうどの頃プリンダーヴァンへ行っていた。カーリーは一カ月内に、ラカールは数カ月後かに、ヨーギンは一年後に帰って来た。何日か後には、ナレンドラ、ラカール、ニランジャン、シャラト、シャシー、バブラーム、ヨーギン、カーリー、ラトウが住みついた。そしてもう家には戻らなかつた。次第にプラサンナとスポドゥも住むようになった。ガンガーダルとハリもあとで仲間に加わった。

祝福されたスレンドラよ！ この最初の僧院^マは、あなたの手によって創られたのです！

あなたの清い願いでこの修行^{アイシュラム}の場ができたのです！ タクール、聖ラーマクリシュナは、彼の尊いマントラ——女と金の放棄——である生きた権化を創造されるためにあなたを道具としてお使いになったのです。独身で放棄の人、純粹な魂であるナレンドラたち信者によって、またもう一度、永遠^{サータタ}なるヒンドウーの宗教^{ダルマ}を人間の前に顕わしてくださったのです。

兄弟（スレンドラ）よ、あなたへの借りを誰が忘れるでしょうか？ 僧院^マの兄弟たちが母を失った子供のように住んでいた時、あなたを待っていたのです——あなたはいつ来るのかと。今日は家賃を払ってお金が全部無くなってしまった。今日は食べるものさえない。あなたはいつ来るのだろうか。来たら兄弟たちの食事の用意をしてくれるだろう！ あなたの飾り気のない愛情を思い出して、涙を流さないものはいないだろう！

〔ナレンドラたちの神への熱望——断食修行〕

ナレンドラはカルカッタのあの下の部屋でモニと話している。現在ナレンドラは、信者たちの指導者^{リダー}であった。僧院^マの兄弟たちの胸には、強烈な離欲の炎が燃えさかっている。見神にあこがれて、身も世もあらぬ状態である。

ナレンドラ「（モニに向かって）何もかも嫌なのです。こうしてここであなたとお話していますが、今すぐにでも立ち上がって出て行きたい気持ちです」

ナレンドラはしばらく沈黙していた。やがてまた言う——「見神ミカミするまで断食しようかなあ？」

モニ「いいですね！ 神のためなら何でもしていいのです」

ナレンドラ「でも、もし、ひもじさに我慢できなくなったらどうしよう……」

モニ「そうしたら何か食べて、また始めたらいい」

ナレンドラはしばらく沈黙していた。そして——

ナレンドラ「神、ないと思うんです！ これ程祈っているのにこゝろ応えが得られない……ただの一度だつて。

マントラが金で書かれたように輝いていたのを、どれほど見たことか！

カーリー女神の姿をどれ程見たことか！ それに、ほかにもいろいろな形のものを見たことか！ それなのに、心の平安が得られないんです。

六パイサ下さいませんか？」

ナレンドラはシヨババザールからバラナゴルの僧院マトまで乗合馬車に乗って行くので、その馬車代のための六パイサである。

そうしているうちに、シャト(シャトカリ)が馬車で到着して部屋に入ってきた。シャトはナレンドラと同年である。僧院マトの兄弟たちを心底から愛していて、始終僧院マトに通っている。彼の家は僧院マトの近くにあるのだ。カルカッタの会社に勤めている。家には馬車がある。その自家用馬車に乗って、会社からここまで来たのである。

ナレンドラはモニに六パイサを返した。シャトの馬車で行くから……、と言うのである。何か少し食べるものと言うので、モニは二人にちよつとした飲み物と食べ物とを供した。

モニもその馬車に乗って、彼らといっしょに僧院に行くつもりである。——一行は夕方、僧院に着いた。僧院の兄弟たちがどのようにして日を過ごしているか、また修行をしているか、モニは見るつもりだ。タクール、聖ラーマクリシュナが弟子たちの胸にどのように映っているかを見るために、彼はこうして時々僧院を訪れるのだ。僧院にニランジャンはいなかった。彼はこの世でたった一人残った肉親である母に会うため、家に帰っている。バブラーム、シャラト、カーリーの三人はプリーに行っている。そこであと数日滞在して、山車祭を拝観してくる予定らしい。

〔タクール、聖ラーマクリシュナの叡智で結ばれた家族とナレンドラの指導〕

ナレンドラが僧院の兄弟たちを指導している。プラサンナ(後のトリグナテイターナンダ)はここ数日、厳しい修行をつづけていた。ナレンドラは彼にも例の断食の話——神を覚るまで断食するという話をしたので、彼の求道心をあおり立てたのだ。ナレンドラがカルカッタに行っている間に、どこかへ出かけたきり行方知れずになっている。帰ってきてその一部始終を聞いたナレンドラは「ラージャ(ラカール)は、どうして彼を引き止めなかったんだ?」と言った。しかし、ラカールはいなかった。彼は南神村のお寺の庭を散歩しに行つたのである。ラカールのことを皆はラージャと呼んでいた。ラカール・ラージャ(牛飼いの王)は、聖クリシュナのもう一つの名前である。

ナレンドラ「ラージャが来たら、一度叱つてやらなけりゃ！ なぜブラサンナを出て行かせたんだ？（ハリシユに向かつて）君は足をひろげて、突っ立って説教していたんだらう。彼を引き止めることはできなかつたのかい？」

ハリシユ「（低い静かな声で）ターラク兄タウがそう言ったのですが、彼は出て行きました」

ナレンドラ「（校長に向かつて）多くの苦勞がよくわかりでしょう。此処もマーヤーの世界の一つなのです。それにしても、あのガキはいつたい何処へ行つてしまつたのかな」

ラカールドゥキネンヤルが南神村のカーリー寺から戻つてきた。バヴァナートも彼といっしょに行つたのだつた。

ナレンドラはラカールにブラサンナのことを話した。ブラサンナはナレンドラに宛てて一通の手紙を書いていた。その手紙が読まれた。こういうことが書いてある——「わたしはプリンダーヴァンへ歩いて行きます。此処に住んでいることは、私にとって危険だと思つてからです。此処で、私の心境は変わりつつあります。以前は、父や母や家族の者たちの夢をよく見たものです。その後でマーヤーの権化クワンの夢も見ました。そして二度、かなり苦しみました。自宅に戻らねばなりません。それでこの際、遠くへ行きます。大覚バダハシヤ者様は私にこうおっしゃつたのです——『お前の家の連中はどんなことでもやりかねないよ、信用してはだめだ』と」

ラカールは言う「彼が出て行つたのは、こういういろいろな理由があつてのことだよ。それから、こうも言つていた——『ナレンドラは時々、家に帰りますね——お母さんや弟や妹たちの面倒をみるために。あれを見ると、私も家に帰りたくなりそうな気がして心配です』と」

これを聞いたナレンドラは、しばし沈黙していた。

ラカールは巡礼に行く話をした。「此処こゝにいても何にもなっていない。あのかた（タクル）は、神を見よ」とおっしゃったが、それができたかい？」ラカールは横になっている。他の信者たちは、或るものは横になり、また或る者は坐っている。

ラカール「行こう。ナルマダーに行こう」（訳註、ナルマダー——インド中央部アマルカントク高原を源に西に向かつてアラビア海に注ぐインド第二の大河で、ガンジス河と並ぶ聖なる河）

ナレンドラ「さまよい歩いて、どうにかなるのかい？ 智慧を体得することができるのかねえ？ 智識、智識、と言つてばかりいるくせに！」

一信者「では、なぜ世間を捨てたんだい？」

ナレンドラ「ラーマ（神）に会えないからといって、シャーマ（女）といつしよに暮らすのか——男の子や女の子の父親になって。何て話だ！」

こう言つてナレンドラは立ち上がり、外に出た。その間もラカールは寝ころんでいる。

ナレンドラがすぐ戻つてきて、また坐りこんだ。

一人の信者が寝ころんでいながら、さも苦しそうなふりをして——神を見ることができないので悩み苦しむふりをしてこう言った。——「おお、私に一振りの短剣をとつてくれ給え！ もうこの命に用はない！ もうこれ以上の苦悩には耐えられぬ！」

ナレンドラ「お（お）そかに深刻な面持ちで）ここにあるぞ。手をのばして取れ！」（一同爆笑）

ブラサンナのことがまた話題になった。

ナレンドラ「此処にいてもマヤー！　だが、何故サンニヤーシン(出家)になった？」

ラカール「解脱とその修行」という本にあるんですよ。出家たちは集まって住んでいてはいけないうて——。出家の町なんて言葉も出てくる」

シャシー「私は出家ということにこだわらない。私にとっては、行けない所なんてありません」

こんどはバヴァナートの話になった。バヴァナートの妻は重病にかかっていた。

ナレンドラ(ラカールに)バヴァナートの嫁さんはどうやら助かるらしい。それで彼はホツとして、南神村ドツキネーシヨルの寺に一息つきに行ったんだよ」

カンクルガチの莊園の話になった！　ラームがそこにお寺を建てるのである。

ナレンドラ「(ラカールに)ラーム氏は、校長先生を理事の一人にしたんだよ」

校長「(ラカールに)でも、私は何も知らないのですよ」

夕方になった！　タクール、聖ラーマクリシュナの部屋にシャシーが香を焚いた。かの部屋の神々の絵の前にも香を焚いて、甘い声で称名しながら礼拝プロナムした。

こんどは献灯アールテがはじまった。僧院マトの兄弟たちや他の信者たちは手を合わせて立ち、献灯を見まもっている。銅鑼ドラと鐘が鳴り、一同は声をあわせて献灯の歌をうたう——

ジャヤ、シヴァ、オームカーラ

ジャヤ——勝利

バジャ、シヴァ、オームカーラ

ブラフマー、ヴィシユス、サダー・シヴァ

ハラ ハラ ハラ マハーデーヴァ

バジャ——崇拜

サダー——常に

ハラ——「万物を破壊するもの」の意でシヴァ
神の別名

ナレンドラがこの歌を献灯歌としてとりいれたのである。ベナレス（カーシーダム）のヴィシユヴァ
ナート（シヴァ神）の前でこの歌がうたわれているのだ。

モニは僧院^{マト}の兄弟と会って、心の底から満足し喜んでいた。

僧院^{マト}で食事その他が終わったのは夜の十一時だった。皆は床についた。兄弟たちはモニのために寝
床を用意してくれた。

深夜十二時過ぎ——モニは眠っていない。彼は思う——すべてはもとのままだ。あのアヨーデイヤ
にラーマがいないだけ——。モニは黙然として起き上がる。今日はボイシヤク月の満月。モニはひと
りでガンガーの堤を歩いている。歩きながら、タクール、聖ラーマクリシュナのことを思い出していった。